



MUSIC PEN CLUB, JAPAN

第30回 ミュージック・ペンクラブ音楽賞 決定のお知らせ

日本の主な音楽評論家(クラシック、ポピュラー、オーディオ)が加盟する団体、一般社団法人ミュージック・ペンクラブ・ジャパンでは、毎年、ミュージック・ペンクラブ音楽賞を選出しております。ミュージック・ペンクラブ音楽賞は、上記三分野の評論家、研究者、有識者が純粋に音楽的な見地から毎年の優秀音楽作品、コンサート、アーティストを自主的に選ぶ、日本で唯一のクリティックスポールです。2017年度 第30回音楽賞が決定いたしました。

受賞作品(受賞者)一覧、受賞理由などをお知らせいたします。

尚、受賞式は4月23日(月)16:00より、文京シビックセンターにて行います。

賞の紹介と併せ、ぜひご取材くださいますよう、お願い申し上げます。

ミュージック・ペンクラブ・ジャパン 会長：鈴木道子

ミュージック・ペンクラブ・ジャパン 会員一同

(クラシック、ポピュラー、オーディオ)

<http://www.musicpenclub.com>

受賞一覧

■クラシック部門

独奏・独唱部門賞＝小倉貴久子(フォルテピアノ)

室内楽・合唱部門賞＝鈴木雅明(音楽監督・指揮)／バッハ・コレギウム・ジャパン(合唱&管弦楽)

オペラ・オーケストラ部門賞＝シルヴァン・カンブルラン(指揮)／読売日本交響楽団(管弦楽)

現代音楽部門賞＝西川竜太(合唱指揮者)

研究・評論部門賞＝神部智・著「シベリウス」(音楽之友社)

功労賞＝三宅幸夫(音楽評論)

特別賞＝ラドミル・エリシュカ(指揮)／札幌交響楽団(管弦楽)

有田正広(フルート・指揮)

■ポピュラー部門

最優秀作品賞＝坂本龍一「a s y n c」(Commons R2CM-86314)

作品企画賞＝One Step Festival 永久保存盤 21枚組(SUPER FUJI FJSP-288)

イベント企画賞＝上原ひろみ×エドマール・カスターネーダ

新人賞＝tea(ヴォーカル)

著作出版物賞＝田中勝則・著「中村とうよう、音楽評論家の時代」(二見書房)

特別賞＝かまやつひろし(シンガー)

ボニージャックス(コーラス)

■オーディオ部門

技術開発＝フォノカートリッジ青龍(有限会社トップウイング)

優秀録音＝インバル指揮・東京都交響楽団「ショスタコーヴィチ／交響曲第8番」(EXTON OVCL00635)

特別賞＝アキュフェーズ株式会社～量を追わず質を追求する製品作りと、初回発売の旧製品まで修理する、ユーザーと密着した長年の企業姿勢に対して～

功労賞＝貝山知弘(オーディオ評論)

ミュージック・ペンクラブ音楽賞に関してのお問い合わせは
MPCJ事務局 080-8051-6652 / mail1@musicpenclub.com

【各賞紹介】

■ クラシック部門

● 独奏・独唱部門賞

小倉貴久子（フォルテピアノ）

日本におけるフォルテピアノの第一人者であり、独奏者および室内楽奏者として、充実した活動を繰り広げている。現時点では、残念ながら、幅広く認知されているとはいえないフォルテピアノという楽器について、その魅力を紹介したり、フォルテピアノの奏法のレクチャーなども積極的に行なっている。ディスクに関しても、2017年にリリースされたビゼーの作品集では、プレイエル（1848年製）を魅力的に奏でる一方で、ロベルト & クララ・シューマンの作品集ではJ.B.シュトライトハイヤー（1845年製）、モーツァルト集ではA.ヴァルターに基づくマーネによるレプリカといった具合に、各楽器の特性をきちんと把握し、音楽をフレッシュに形づくっている。（満津岡信育）

東京藝術大学を経て同大学大学院ピアノ科修了。アムステルダム音楽院を特別栄誉賞付き首席卒業。日本モーツァルト音楽コンクール、ピアノ部門第1位。ブルージュ国際古楽コンクール、アンサンブル及びフォルテピアノ両部門で第1位と聴衆賞を受賞。様々な鍵盤楽器を弾き分けた多彩なコンサートや音楽祭、テレビ、ラジオへの出演も多い。40点以上リリースのCDの多くが各新聞紙上や「レコード芸術」誌等で推薦盤や特選盤に選ばれている。平成24年度文化庁芸術祭〈大賞〉受賞。著書にカラー図解『ピアノの歴史（CD付き）』（河出書房新社）他。シリーズコンサート「小倉貴久子の《モーツァルトのクラヴィーアのある部屋》」好評展開中。東京藝術大学古楽科非常勤講師。http://kikuko-mdf.com



● 室内楽・合唱部門賞

鈴木雅明（音楽監督・指揮）／バッハ・コレギウム・ジャパン（合唱&管弦楽）

日本を代表する世界的な古楽アンサンブルとして重要な価値を持つ。時系列順に取り組んだバッハ「教会カンタータ全曲シリーズ」の全曲演奏及び録音という金字塔を近年完成させ、次いで「世俗カンタータ」シリーズの全曲演奏及び録音を完遂。昨年はルターの宗教改革500周年記念として「ルター500プロジェクト」も完遂した。また、モンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》に挑戦するなど活動の幅をさらに広げつつある。日本での公演に加え、ニュージーランド、メキシコ公演をはじめ、度重なる欧州ツアーやアメリカ公演を成功させていることで、その活動ぶりは以前にも増して世界に広く知れわたり、日本にバッハ、バロック演奏の重要な拠点があると知らしめている功績は大きい。（山田真一）

世界的なバッハ演奏家として、オルガン・チェンバロ奏者、指揮者、また音楽研究者としてもその才能を高く評価されている鈴木雅明。オリジナル楽器のスペシャリストを擁し、1990年にオーケストラと合唱団「バッハ・コレギウム・ジャパン」を結成。バッハの宗教作品を中心としたバロック音楽の理想的上演を目指し、日本国内外で活発な演奏活動を展開。1995年から時系列順で取り組んできた「バッハ：教会カンタータシリーズ」が2013年に、「世俗カンタータシリーズ」が2017年7月に全曲演奏・録音を完遂。2014年エコー・クラシック賞エディトリアル・アチーブメント・オブ・ザ・イヤー部門、2013年度第45回サントリー音楽賞、2017年グラモフォン賞（モーツァルト：ミサ曲ハ短調）ほか受賞多数。



©Marco Borggreve

● オペラ・オーケストラ部門賞

シルヴァン・カンブルラン（指揮）／読売日本交響楽団（管弦楽）

シルヴァン・カンブルランと読売日本交響楽団は2017年11月、定期演奏会の枠組みの中でメシアンの大作「アッシジの聖フランチェスコ」全曲日本初演（演奏会形式）を行なった。それまでにいくつかのメシアン作品を取り上げるといって「準備段階」を経ていたこと、楽団が高いモチベーションを維持していたこと、事務局が多層的なサポートを行ったこと、そして最高レベルの歌手を揃えたことといった条件が相まって、その成果は想像をはるかに上回るものになった。しかし重要なのは、単によい演奏をしたということではない。同楽団は経済的にきわめて恵まれている部類に属するが、そのメリットをただ漫然と甘受するのではなく、一種の「ノブレス・オブリージュ」を自覚し、果たそうという強い意志を表明している点が何よりも称賛に価する。こういうオーケストラの存在は日本のクラシック音楽文化を大きく成長させるものであろう。現代オペラにも関わらず、東京公演はすべての席が瞬間に完売したという一事をもってしても、聴衆の期待の高さがうかがえる。2017年のクラシック音楽界における最大の成果、そして最大の事件のひとつとして記憶されるべき公演であった。（沼野雄司）

シルヴァン・カンブルラン（指揮）Sylvain Cambreling, Conductor

色彩豊かな音楽作りで、読響を世界のトップレベルへと導く名匠。1948年フランス・アミアン生まれ。2010年から読響常任指揮者を務め、古典から現代まで幅広いレパートリーを演奏し、高い評価を得ている。現在、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を務めるほか、クラウンフォーラム・ウィーン的首席客演指揮者も兼任している。ベルギー王立モネ歌劇場とフランクフルト歌劇場の音楽監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR響の首席指揮者を歴任。世界の一流楽団に客演するほか、ザルツブルク音楽祭などでも活躍している。17年11月には読響とメシアン之歌劇「アッシジの聖フランチェスコ」（演奏会形式）を披露し、『音楽の友』誌の「コンサート・ベストテン2017」で第1位に選出されるなど絶賛された。



©読響

読売日本交響楽団 Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

1962年、日本のクラシック音楽の振興と普及のために読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビのグループ3社を母体に設立された。創立以来、世界的な指揮者、ソリストと共演を重ねている。現在、名誉顧問に高円宮妃久子殿下をお迎えし、常任指揮者をシルヴァン・カンブルランが務め、東京のサントリーホールや東京芸術劇場などで充実した内容で演奏会を多数開催。また、小中学校や病院での演奏などの社会貢献活動を通じ、音楽文化のすそ野拡大に地道な努力を続けている。《定期演奏会》などの様子は日本テレビ「読響シンフォニックライブ」で放送されているほか、インターネットの「日テレオンデマンド」でも動画配信され、好評を博している。



©読響

●現代音楽部門賞

西川竜太（合唱指揮者）

西川竜太という一人の存在によって、日本の現代合唱作品の地平は大きく変貌しつつある。西川は「ヴォクスマーナ」「クール・ゼフィール」「空」「暁」といった複数の合唱団を主宰しながら、これまでに150を超える新作委嘱を行ってきた。この新作群には、それまでに必ずしも合唱に積極的ではなかった作曲家の作品が多数含まれているのだが、彼らはみな、西川の率いる合唱団というきわめて信頼し得る、そしてきわめて自由な場を得て、のびのびと個性を展開し始めることになった。結果として、現代音楽界の中にあつた「合唱」をめぐる様々な垣根は今やほとんど崩壊してしまったと言ってよい。2017年は、例年通りの活発な演奏会活動のみならず「近藤譲合唱作品集」「伊藤弘之合唱作品集」（いずれも、一般的には「合唱」イメージの薄い作曲家であることに注意されたい）という2枚のCD発売が加わり、まさに時宜を得た贈賞となった。（沼野雄司）

1972年生。早稲田大学、東京芸術大学卒業。同大学院修士課程修了。JFC主催「アジア音楽祭2010」にて、7カ国の作曲家の8作品の世界・日本初演を指揮。2011～16年「湯浅譲二・松平頼暁 合唱作品による個展」を企画・指揮。「秋吉台の夏2013」現代音楽セミナー&フェスティバルに招聘講師・演奏家として参加。芸大在学中、声楽科有志と共に、1人1パート編成の声楽アンサンブル「Vox humana ヴォクスマーナ」を創設し、指揮者に就任。男声合唱団クール・ゼフィール、混声合唱団空、女声合唱団暁の指揮者。成蹊大学混声合唱団常任指揮者。都立総合芸術高校音楽科講師（合唱）。音楽の新しい時代の創造を目指し、作曲家と協力して、これまでに160作品を初演。2012年、第21回朝日現代音楽賞受賞。HP=ryutanishikawa.wixsite.com/ryutanishikawa



●研究・評論部門賞

神部智・著「シベリウス」（音楽之友社）

音楽之友社の「作曲家◎人と作品シリーズ」の一冊として、文字数的な制約がある中で、シベリウスの人生と創作について多面的に光を当てた力作である。最新の研究成果を盛り込みつつ、ステレオ・タイプの見方を排した評伝が、日本語で手軽に読めることを喜びたい。生涯篇では、彼の親族やフィンランドの歴史および文化的背景についても記述があり、作品篇では各作品の特徴が手際よく紹介されている。また、生涯篇では、失われた交響曲第8番をめぐる問題も論じられている。現代に生きる人々に向けて、驚くほど多様なメッセージを投げかけているシベリウスの音楽を、きちんと読み解いて愉しむために、大いに啓発される内容になっている。（満岡信育）

神部 智 Satoru Kanbe

茨城大学教授。ヘルシンキ大学大学院博士課程修了。博士（音楽学）。大阪大学、宇都宮大学、国立音楽大学講師を歴任。東京藝術大学、横浜国立大学、早稲田大学の公開講座、自治体主催の市民講座の講師をはじめ、NHK番組の出演・監修など、多方面で幅広く活躍している。シベリウスに関する論文、エッセイ、プログラム・ノート、ミニチュア・スコア（音楽之友社）の解説を多数執筆。著書に『シベリウスの《クレルヴォ》と《レンミンカイネン》 形式、イメージ、音楽的語り』（国際記号学会、英語）、『シベリウスの交響詩とその時代 神話と音楽をめぐる作曲家の冒険』、『作曲家◎人と作品 シベリウス』（以上、音楽之友社）など。



● 功労賞

三宅幸夫 Yukio Miyake (音楽評論)

三宅幸夫さんとは、若いころにドイツのチュービンゲン大学で共に学んだ仲なので、彼の急逝には驚かされた。小学館『バッハ全集』を一緒に作った思い出も懐かしい。シューベルトやブラームスに関する著作でも独自の世界を作られたが、日本ワーグナー協会理事長として、日本のワーグナー研究と受容に果たされた貢献は特筆すべきものである。特に同協会監修のワーグナー全舞台作品の「対訳シリーズ」（1990～2013年）においては、三宅さん執筆の「解題（音楽）」が、それぞれの作品のもつ音楽的相貌をみごとに伝えてくれている。『シシュフォスの神話、ワーグナー試論』（五柳書院、2014年）は、まさに彼のワーグナー研究の総決算というべき名著である。（樋口隆一）

1946年東京生まれ。早稲田大学理工学部卒業。ドイツチュービンゲン大学修了音楽学(MA)。慶應義塾大学名誉教授。日本ワーグナー協会理事長。音楽学者・音楽評論家。2017年没、享年71歳。

専門分野：バッハの作曲技法と19世紀ドイツ音楽

著書：『ブラームス』（1986年 新潮社）、『歴史の中の音楽』（1988年 平凡社）、『スフィンクスの嘆き-バッハの生涯と作品』（1992年 五柳書院 壮一学術奨励賞）、『音楽家の言葉』（1997年、五柳書院）、『菩提樹はさざめく』（2004年、春秋社）、『シシュフォスの神話-ワーグナー試論』（2014年、五柳書院）など。

訳書：ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』（京都音楽賞）、『ラインの黄金』、『ヴァルキューレ』、『ジークフリート』、『神々の黄昏』など共訳でワーグナー10作品。



● 特別賞

ラドミル・エリシュカ(指揮)／札幌交響楽団(管弦楽)

ヤナーチェクの孫弟子に当たるチェコ人マエストロ、ラドミル・エリシュカは1931年生まれ。前年度に特別賞を受けたイスラエル人マエストロ、モーシェ・アツモンと同年齢である。アツモンが39年間にわたって日本へ客演したのに対し、母国で長くレッスンプロ（指揮科教授）に甘んじていたエリシュカは2004年に73歳で初来日、17年10月に名誉指揮者を務める札幌交響楽団（札幌）と日本最後の演奏会を開くまで、14シーズンの来演歴しかない。しかし、06年の初共演で「相思相愛」に陥った札幌とは奇跡の名演奏を繰り広げドヴォルザーク、スメタナ、ブラームス、チャイコフスキーなど多くのライブ盤を制作した。NHK交響楽団はじめ他の楽団からも最も熱望される客演指揮者であり続け、偉大な足跡を記した。（池田卓夫）

ラドミル・エリシュカ 名誉指揮者 Radomil Eliška, Honorary Conductor

1931年チェコ共和国生まれ。ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」の欧州初演をしたことで知られるチェコのカルロヴィヴァリ交響楽団の首席指揮者・音楽監督として1969年から90年まで活躍。そのほかチェコ・フィルを始めチェコ国内のほとんどの楽団を指揮したほか、ドイツ、オーストリア、スペイン、旧ソビエト等で客演。2004年に初来日し、2008年から札幌交響楽団首席客演指揮者を、2015年からは名誉指揮者を務める。エリシュカと札幌の組み合わせはライブ収録などを通じ、大きな注目を集めている。2017年「日本におけるチェコ文化年2017」の名誉委員を務める。



©M.sato

札幌交響楽団

札幌交響楽団は、1961年発足。北海道唯一のプロ・オーケストラとして、「札幌」の愛称で親しまれる。透明感のあるサウンドとパワフルな表現力は、国内はもとより海外でも評価が高い。歴代指揮者には、名誉創立指揮者の荒谷正雄、ペーター・シュヴァルツ、岩城宏之、秋山和慶、尾高忠明などが務めた。現在、首席指揮者のマックス・ポンマー、名誉音楽監督の尾高忠明、名誉指揮者のラドミル・エリシュカ、友情客演指揮者に広上淳一、指揮者として佐藤俊太郎と垣内悠希を擁し、この4月からは首席指揮者にマティアス・バーメルトを迎える。現在、年間公演数は約120回、さらにアウトリーチ活動にも積極的に取り組んでいる。海外ではヨーロッパ、アメリカ、アジア諸国を訪問し、各国で好評を博した。



●特別賞

有田正広(フルート・指揮) Masahiro Arita

日本を代表するフルート奏者として長年ヨーロッパの古楽アンサンブルや名手たちと質の高い活動を行ってきたが、日本におけるオリジナル楽器オーケストラの先駆けとして1989年に「東京バッハ・モーツァルト・オーケストラ」を結成、09年にはロマン派もレパートリーとするオリジナル楽器オーケストラに発展させ昨年まで活動した「クラシカル・プレイヤーズ東京」により、日本で古楽奏法を身近にした功績は大きい。ルネサンスから現代までのフルートのコレクションは世界有数で、そのメンテナンス方法、演奏方法を熟知し、レクチャーコンサートなどで紹介をする活動も非常に意義が大きい。また、鍵盤古楽器のコレクションも豊かで今後の活動にも目が離せない。(山田真一)

日本の古楽界をリードする有田正広は、ブルージュ国際音楽コンクールなど数々のコンクールで輝かしい受賞歴を持ち、クイケン兄弟、トレヴァー・ピノック、レイチェル・ポジャー等国内外の名手と盛んに共演。特にルネサンスから現代に至る様々な時代のフルートを駆使する有田ならではのコンサートは高い評価を得ている。録音は「ドイツ・バロックのフルート」などDENONアリアーレを中心にリリース多数。第21回サントリー音楽賞受賞。現在、昭和音楽大学教授、桐朋学園大学特任教授。



©Hikaru.☆

■ ポピュラー部門

● 最優秀作品賞

坂本龍一「async」(Commons R2CM-86314)

70年代から現代音楽、電子音楽の世界的な歴史を見据えつつ、新しい音楽性を追求してきた坂本龍一の総決算ともいえる作品。20世紀中盤からのミュージック・コンクレート、ミニマル音楽、環境音楽、テクノ、オルタナティブ、クラブ音楽……。その全てを精細に消化した上で、さらに21世紀の現在にふさわしい新しい音楽性を追求、華麗に構築した本作は、日本が世界に誇るべき創造力に富む前衛音楽である。同時に環境を震わせ、なじませ、人間をなごませる日常音楽としても成立している。ポピュラー音楽と現代音楽の垣根を越えたこの位相も、真に畏敬と賞賛に値するものである。なお前進を止めることのない、その横溢する才能に敬意を表したい。(サエキけんぞう)

1952年東京生まれ。1978年に『YMO』を結成。『戦場のメリークリスマス』で英国アカデミー賞。『ラストエンペラー』の音楽ではアカデミー音楽作曲賞、グラミー賞他を受賞。常に革新的なサウンドを追求する姿勢が世界的評価を得ている。環境や平和問題への言及も多く、森林保全団体「more trees」の創設、「stop rokkasho」、「NO NUKES」などの活動で脱原発を表明、音楽を通じた東北地方太平洋沖地震被災者支援活動も行っている。山口情報芸術センター、札幌国際芸術祭2014のディレクターとしてアート界への越境も積極的におこなういっぽう、2015年には映画「母と暮せば」「レヴェナント：蘇えりし者」の音楽を制作。2016年にも「怒り」の音楽を担当した。2017年に8年ぶりとなるソロアルバム「async」を発表。



Photo by zakkubalan
(C)2016 Kab Inc.

● 作品企画賞

「One Step Festival 永久保存盤 21枚組」(SUPER FUJI FJSP-288)

1974年8月、福島県郡山で7日間にわたって開催された「ワン・ステップ・フェスティバル」は、日本で初めてといってよい、空前のスケールをもつ本格的なロック・フェスティバルだった。もともとはウッドストック・フェスティバルに刺激された福島の青年が4年がかりで構想したものを、内田裕也氏、石坂敬一氏が総合プロデュースを買って出た。その模様がCD21枚組というボックス・セットにまとめられている。クリエイション、サウス・トゥ・サウス、センチメンタル・シティ・ロマンス、沢田研二&井上堯之バンド、四人囃子、ダウントOWN・ブキウギ・バンド、ミッキー吉野グループ、内田裕也&1815、ロックンロール・バンドなどに加え、海外からもクリス・クリストファーソン&リタ・クーリッジが参加。37組の音源のうち、30組はほぼノーカット。初出音源も多く含んでいて、フェスティバルの全容を知ることができる。大量のマスターテープから最新リマスターリング。野外ジャパン・ロック・イベントの原点ともいえる大イベントをアルバム化した意義は大きい。(岡崎正通)



● イベント企画賞

上原ひろみ×エドマール・カスターネーダ

世界を飛び回って活躍を続けるジャズ・ピアニスト、上原ひろみと、ジャンルを超えて活動を繰りひろげるハープ奏者のエドマール・カスターネーダ。ふたりによる日本での初めてのコンサートは、昨年の11月から12月にかけて、国内の6都市で14日間にわたっておこなわれた。2016年のモントリオール・ジャズ・フェスティバルで出会って意気投合し、すぐに共演することを決めたふたり。ピアノとハープという組み合わせは異色であるものの、ぴたりと息の合った演奏を聴かせて並み居るファンを魅了しつくした。ふたりの音楽に賭ける思い、情熱、そして何よりも音楽性が見事に絡み合ったライブ・ステージは、演奏の濃密さという点でも、まさに屈指のものであったといえる。(岡崎正通)

上原ひろみ(ピアノ)

1979年、静岡県浜松市生まれ。2003年にジャズの名門テラークから『Another Mind』で世界デビュー。2011年にはスタンリー・クラークとのプロジェクト作でグラミー賞を受賞。アンソニー・ジャクソン、サイモン・フィリップスとのトリオ・プロジェクトによる『SPARK』は全米ジャズ・チャートで1位に輝く。2017年には日本人アーティストでは唯一となるブルーノート・ニューヨークでの13年連続公演を実現した。

エドマール・カスターネーダ(ハープ)

1978年、コロンビア、ボゴタ生まれのハープ奏者で、16歳でニューヨークに移住。ウィントン・マルサリス、マーカス・ミラーをはじめとするトップ・ミュージシャン達と共演し、世界を舞台に活躍中。上原ひろみとは2016年7月にブルーノート・ニューヨークで初共演した。メロディ、コード、ベース・ラインを同時に演奏する超絶かつ情熱的なプレイで注目を浴びている。



● 新人賞

tea(ヴォーカル)

圧倒的な歌唱力と表現力はいずれ国際的な評価を受けるだろう、そんな期待を抱かせてくれる女性シンガー・ソングライターだ。昨年10月にデビュー作として発表になった「Interstellar」はそのことを大いに予感させてくれる。この作品で彼女の魅力を最大限に引き出した時枝弘との出会いも、彼女に大きく影響したと思われる。英米のトップ・アーティストを思わせるサウンド・センスは申し分なく、見事な日本デビューである。結果R&B、JAZZ、CLASSICALのジャンルを問わず日本の音楽関係者の注目するところとなった。ソング・ライティングの力量も高く評価されている。今後日本を拠点に母国インドそしてアジア欧米諸国を視野にいたした活動をしていってほしいものだ。(三塚 博)

インド、プネ出身のシンガー・ソングライター。インドでプロシンガーとして活動後、2011年にアメリカのバークリー音楽大学に入学、2013年同大学ソング・ライティング科を卒業。卒業後はブルーノート・ニューヨークやサンフランシスコ・ジャズ・センターなどに出演。ニューヨークではボイス・トレーナーとしても活躍している。2016年から活動の拠点を日本に移し、翌年10月にJump Worldレーベルより自身初のフルアルバム「INTERSTELLAR」を発表。その洗練されたサウンドが各方面で好評価を得ている。現在は自身のライブ活動の他、ジャズからクラシック、民族音楽までカバーする才能を買われレコーディングやコラボレーション等に幅広い活動をおこなうようになっている。



©SHOKO TAKAYASU

● 著作出版物質

田中勝則・著「中村とうよう、音楽評論家の時代」(二見書房)

1960年代中頃から、日本におけるポピュラー音楽の音楽評論の分野を牽引してきたのが中村とうよう(1932-2011)さん。そんな中村とうようさんのもっとも近くにいたひとりが、プロデューサー、ライターの田中勝則氏である。筆者の目はどうようさんの生涯を追いながら、どのようにして日本独自の音楽評論が確立されてきたかを浮き彫りにしてみせる。同時に日本の戦後において、ポピュラー音楽なるものがどのように浸透していったのかという過程も、克明に知ることができる。フォークやロックをリアル・タイムに聞いてきた団塊世代にはもちろん、世界中のポピュラー音楽を幅広く聞く現代の若者まで、幅広い世代に読んでいただきたい、580ページ近くにも及ぶ力作。(岡崎正通)

著者の田中勝則氏は、1959年、東京都生まれ。81年に音楽評論家としてデビュー。85年からブラジルで伝統的なサンバの演奏家たちの録音をプロデュース。南米やアメリカ、フランスなどでも発売されて好評を得る。90年頃からはアジアの音楽もプロデュース。評論家としてもワールド・ミュージックの記事を執筆。97年にはライス・レコードを立ち上げて、ワールド関係の最先端音源を制作するいっぽう、新録・復刻の両分野で自主制作盤をリリース。2013年からはフリーの立場で、幅広く企画・制作・執筆活動をおこなってきている。



● 功労賞

かまやつひろし(シンガー)

かまやつひろし(ムッシュかまやつ)は、60年代中盤にザ・スパイダースにおいて、日本に定着していなかった英米のバンド音楽技術を自力で解明し、日本に定着させていった功績がある。研鑽された結果、その演奏力は、その当時の一流外国バンド、ビーチボーイズ、アニマルズなどとも拮抗するものとなった。その結果、ロック音楽において日本を、東南アジア圏で圧倒的に優位に立たせることとなった。さらにその恩恵は、90年代のJ-POPも先導することになり、実は計り知れない利益を日本の芸能界にもたらした。一般大衆には未だ十分に知られることのないその功績に対し、音楽評論を旨とするミュージックペンクラブとしては、惜しみない拍手を送ると共に、後世に伝えるべきと考える。

(サエキけんぞう)

“ムッシュ”の愛称で親しまれたかまやつひろし。1939年生まれで、青山学院高等部時代にカントリー&ウェスタン歌手としてデビュー。生来もっていた洋楽フィーリングでカントリーを歌って日劇ウェスタンカーニバルに出演。人気GSグループ「ザ・スパイダース」のメンバーとしてボーカルとギターを担当。“あの時君は若かった”“フリフリ”をはじめとするヒットを飛ばす。ソロ・シンガーとしても“我が良き友よ”が大ヒット。その後もバンド活動を中心に、さまざまなジャンルの日本のトップ・ミュージシャンと共演して、インスピレーションを与え続けた。多くのミュージシャンたちからも尊敬され、愛され続けたかまやつさんだが、2017年3月1日、78才で惜しまれつつ世を去っている。



●特別賞

ボニージャックス（コーラス）

60年間にわたり、ほのぼのとした希望や勇気を与え続けてくれた。5000曲を超えるレパートリーは、世界の民謡や歌曲、黒人霊歌やジャズ、ポピュラー・ナンバー、抒情歌、童謡と多岐にわたるが、ひとつひとつがボニージャックス・トーンと呼ばれる美しく優しさに溢れるハーモニーに包まれて、聴く者の心を和ませる。童謡「小さい秋見つけた」「手のひらを太陽に」、合唱曲「遥かな友に」、ロシア民謡「一週間」などを誰もが歌える国民的な歌に高めた功績は大きい。昨年、新曲4曲を含む「昭和歌暦」を発表し、今後も積極的にコンサートを行っていくという。ダークダックスやデューク・エイセスが表舞台から消えたいま、息長く活動が続けることがこのグループの使命。私たちはそのような期待を込めて特別賞を贈る。（三塚博）

今年活動歴60周年の正統派・老舗コーラスグループ。コーラスブームを牽引したダークダックス、デューク・エイセスに続く、3兄弟の末弟。早稲田大学を卒業と同時にグリークラブのパートリーダー4名で“ボニージャックス”を結成。レパートリーの広さから、『歌の伝道師』の異名をとる。そして、常にその中心で歌い続けてきた童謡・唱歌・抒情歌・民謡などの日本歌曲で高い評価を受けている。昨年にはボニージャックス大全集「懐かしの愛唱歌」のリリースや若手コーラスグループの雄、ベイビー・ブーとの新グループ「ボニーさんとブー」を結成。60周年記念アルバム「昭和歌暦」をリリースするなど、精力的に活動中である。



■ オーディオ部門

● 技術開発

フォノカートリッジ青龍（有限会社トップウイング）

青龍はトップウイングが開発したフォノカートリッジである。同社は元々輸入商社であったが、本機を手がけたことでメーカーとしても活動するようになった。フォノカートリッジの発電原理はMC型とMM型の二種類に大別されるのだが、本機はいずれの方式にも属さないストレートフラックスという方式が採用されている。この方式はコイルが動かないので磁界が非常に安定しており、雑味のないサウンドが得やすい。その設計と製造は非常に困難なのだが、トップウイングはこれを見事にやってのけた。これはトップウイング社長の佐々木原幸一氏のマネジメント能力に負うところが大きい。同氏は別個に存在している技術・技術者・製造能力を巧みに組み合わせることでこの困難を克服したのである。音もさることながら、このベンチャービジネス的な開発手法も大きく評価された。（石原 俊）



● 優秀録音

インバル指揮・東京都交響楽団「ショスタコーヴィチ／交響曲第8番」(EXTON OVCL00635)

インバル／都響のコンビも第5弾となり、過去にも本音楽賞の受賞歴があるが、指揮者と楽団の糸乱れめ呼吸は、このチクルスがよい佳境に達しつつあることを実感させる録音だ。圧倒的なパワーと密度に裏打ちされたリズムとハーモニーは、時にデモニッシュにリスナーを脅し、時にクリアなステレオイメージの中に容赦なく放り込む。透徹とした音場は細部までよく見通すことができ、その奥から畳み掛けるようなリズムの咆哮が轟く。暗く、陰鬱なムードが支配する楽曲だが、これを手塩にかけたオーディオシステムで再生した時の醍醐味は測り知れない。ぜひSACD対応プレーヤーで聴いていただきたい、重厚緻密なアンサンブルである。（小原由夫）



● 特別賞

アキュフェーズ株式会社～量を追わず質を追求する製品作りと、初回発売の旧製品まで修理する、ユーザーと密着した長年の企業姿勢に対して

アキュフェーズは遡ること45年前、情熱滾る若者と高き志を持ったリーダーによって誕生した。量を追うのではなく質を求めるために、トリオ(後のケンウッド)からスピノフした13名の戦士は、自分達が信じる新たな道を切り拓くため、起業したのである。以来ハイエンドのオーディオ製品に特化した物づくりを行いオーディオファンの期待に応えてきた。順調に業績が推移すると裾野を広げたいが、そうした拡大路線を取ることなく、今日まで企業設立時の理念を守り続けている。一目見てアキュフェーズの製品と分かるアイデンティティにもメーカーの誇りが感じられるが、創業時の製品の修理も出来る限り受け付けるといふ、物を大切に作る心を持った懐の深い企業である。（潮 晴男）



E-650

● 功労賞

貝山知弘（オーディオ評論）

貝山さんが映画を論じた文章でいつも感心させられたのが、必ず原作小説を読んでいることだ。現代のマイナーな海外小説も必ず邦訳を探して読んだ。プロデューサーの本能である。映画化の着想と視点がどこにあって、登場人物の造型をどう考えてキャスティングしたか、貝山さんの映像評論はそこから始まる。オーディオビジュアル評論は、画質、音質といったビデオグラムとしての再現性を論じることには終始しやすいが、貝山さんが一本の作品を論じる時は、映画化の着眼に遡り、演出や俳優の演技、撮影手法、音楽や効果音に込められた意味を推察し、家庭用映像音響機器でコマコマして全体をどう再現することが求められるか、を語り明かしていった。もし、貝山知弘がいなければ、日本のオーディオビジュアル評論は土台のあやふやなものになっていたろう。（大橋伸太郎）

昭和八年、神奈川県鎌倉市の名刺の次男に生まれ早稲田大学仏文科を卒業、東宝株式会社に入社。「狙撃」(1968)、「化石の森」(1973)、「はつ恋」(1975)等々の製作業務に携わった後、独立。1983年の「南極物語」が国内興行収入の記録を塗り替える大ヒット作となる。その後も「ストロベリー・ロード」(1991)、米、加、日合作「ジ・エンド・オブ・パールハーバー HIROSHIMA」(1995)等を手掛ける。湘南高校在学時に校内放送の設備を設計したことでオーディオに深い関心を持ち、映画製作の傍ら、オーディオ評論を執筆。1980年代には、映画製作の経験知識を活かしオーディオビジュアル評論の先駆者となる。VGP(ビジュアルグランプリ)審査委員長、AEX(オーディオ銘機賞)審査員。ミュージック・ペンクラブ・ジャパン前会長。本年1月7日逝去。



■ 第30回 ミュージック・ペンクラブ音楽賞授賞式

日時：4月23日(月) 午後4時～(予定) 受賞式
午後5時30分～7時30分(予定) 懇親会

会場：文京シビックセンター 26F スカイホール
東京都文京区春日1 - 16 - 21

★取材のお申し込み・お問い合わせは・・・
ミュージック・ペンクラブ・ジャパン事務局
080-8051-6652
mail1@musicpenclub.com / musicpen@alpha.ocn.ne.jp

■ 一般社団法人ミュージック・ペンクラブ・ジャパン

ミュージック・ペンクラブ・ジャパンは、1966年に設立された「音楽執筆者協議会」を母胎としています。この団体は当時の音楽界の第一線に立つ約40名のクラシック、ポピュラーの音楽評論家・オーディオ評論家によって結成されたもので、会員の原稿料・著作権保護を求め、同時に言論による日本の音楽文化の向上を目指した権益保護団体でした。1994年に、ペンをもって音楽と関わる人材を集めた組織として、名前を「ミュージック・ペンクラブ・ジャパン」に変更。2014年には、音楽文化の発展を担う組織として、その活動を一層公的かつ国際的なものとするべく法人化にも踏み切りました。会員の幅は広がって、現在では音楽評論家、オーディオ評論家、音楽学者、音楽ライター、作曲家、演奏家、プロデューサー、訳詩者、編集者など、多様な職域から音楽に関わる専門家が結集しています。また、当クラブ発信のホームページを持ち、音楽賞や音楽イベントなどの文化活動を定期的に行っています。2018年現在、会員数は約160名です。

会長：鈴木 道子(ポピュラー)
副会長：横堀 朱美(クラシック)
潮 晴男(オーディオ)
事務局長：櫻井 隆章(ポピュラー)

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会本館22号室
ミュージック・ペンクラブ・ジャパン事務局
TEL/FAX 03-3556-0200 / 080-8051-6652
e-mail. mail1@musicpenclub.com
musicpen@alpha.ocn.ne.jp